

## 「国史」教育の罪過

著者	宮永 孝
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	65
号	2
ページ	1-49
発行年	2018-09
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00021386">http://doi.org/10.15002/00021386</a>

# 「国史」教育の罪過

宮 永 孝

はじめに

- |   |                                  |   |   |
|---|----------------------------------|---|---|
| 一 | 日本国と皇室の起源                        | 一 | 太平洋戦争の勃発  |
| 一 | 歴史学者の皇国史観                        | 一 | 戦時下の公認・標語 <small>スローガン</small> と政府の告諭（いいきかせること） |
| 一 | 昭和天皇がまなんだ日本史                     | 一 | 通信検閲からみえてくる国民生活                                 |
| 一 | 戦前の小・中学校の「修身」および「国史」教科書にみられる指導理念 | 一 | 戦時下のレジスタンス                                      |
| 一 | 絶対主義君主制の樹立                       |   | 罹災者と壕舎生活者                                       |
|   |                                  |   | あとがき  |

はじめに

いまを生きるおおかたの日本人は、古今みぞうの太平洋戦争を、単に遠い過去のできごととして捉えるだけであろう。戦争体験がないため、実感がなしいし、興味もないかもしれない。終戦から七十余年、われわれはいま平和を謳歌しているが、過去の戦禍を教訓として、そこからいろいろな学ばねばならない。歴史はまたくり返すというから。……

神代じんだい（かみよ）の記述からはじまったわが国の歴史（国史）教育は、明治以来、敗戦の日まで、帝国主義的な侵略政策——戦争指導の根源（1）をなしてきたといっても過言ではない。ことに昭和初期——満州事変以来、わが国の政治はにわかに右傾化し、武力紛争を拡大し、戦争をはじめること

とで国威を発揚する傾向がよくなった。為政者や軍の高官の頭のなかにあったのは、ひとりよがりの国粹主義、神民思想であったといえる。やがてそういった偏狭的な考えは、軍国主義・侵略主義の衣をまとうようになり、ついには太平洋戦争へと至るのである。日本のファシズムは、国民を戦争へとかりたて、アジア諸国民に甚大な惨禍をもたらし、さらには直接戦闘に加わらない一般国民を空襲と飢餓の地獄へとつきおとしたのである。本稿はおもに国民の意識操作に大きな効果があった『国史教育』の中味と戦時下をいきた市民の受難の歴史をふり返ったものである。

## 一 日本国と皇室の起源

アジア大陸の東端にある——日本列島（弧状列島）の住民は、むかしから組織・富・武力などをもった権利者とそれに隷属したぜい々な民衆から成っていた。日本の歴史、過去の日本史において、大きな役割を演じたのは皇室（天皇家）であり、この宗主（首長）を中心に物語られたきたのは、国史であったといえる。

戦前、神秘のベールにつつまれていた神がかり的な天皇家の起源やその系譜について疑問を差しはさんだり、卑見をのべたりすることは、皇室にたいする冒とくであり、あえてそれをおこなうと法にふれた。が、昭和二十年（一九四五）八月十五日——太平洋戦争に敗けた結果——皇国史観（神がかり的な歴史の見方）が、いっきにひっくり返り、自由に論究できるよい時代が到来した。

日本民族がくらす、この小さな国——日本の起源や天皇家のおこりについては、たしかなよりどころとする文献資料がないため、よくわからないというべきであろうが、考古学や人類学、朝鮮や中国の史書にみられる日本についての断片的記述から、あるていどの説明が可能である。

北から南へかけて細長くつらなるこの島々に、われわれの祖先はいつごろ住みついたものか、はっきりとはわかっていない。が、およそ四〇〇〇年まえのことらしい（『日本の国ができるまで』日本評論社、昭和25・4）。

当時（石器時代）は原始共産制社会——無階級社会であり、われわれの先住民は、野山において木の実（クルミ、クリ、トチ）をあつめ、シカやイノシシをとり、海岸に出てはハマグリやしじみをひろい、海では釣りばりを使って魚（マグロ、カツオ、スズキ、タラ、カレイなど）をとらえて、食べものとしていた。住民のくらしは、基本的には狩や漁業による採取経済であった。が、やがて縄文時代（新石器時代）になると、海の



原始共産制社会——けものを狩る先住民の想像図。



“田うえ”の想像図。

『日本の国ができるまで——目で見える日本史』（日本評論社，昭和25・4）より。

むこうからイネが伝わり、原始的農耕がはじまった。

イネはもともと南方のあつい、湿気が多い地方で自生していたものであり、それが大陸（中国の華南——揚子江の下流域）につたわり、そこからさらに紀元前二〜三世紀ごろ、日本に伝わったものらしい。イネをもたらしした渡来人は、金属の道具（青銅器、鉄器）をもつたえた。やがてひとびとは、池やみぞをほり、水をひき、水田をつくった。が、稲作をやるには、ひとつの土地に住みつく必要が生じた。そのためには食べものを求めて移動する生活をやめ、水害のない場所——山のふもとや野の水があるところ——に田んぼや家をつくった。

人家がむらがると、しぜん“村”ができ、そのうちに村を運営するために、頭（<sup>かしら</sup>一群の長）が必要となり、その者が村をまとめ計画をたて、さしずめるようになった。かくして村を中心とするひとびとの集合体が日本各地にできた。

村をおさめる者は、“ギミ”（君）とよばれた首長である。この“ムラギミ”の大きな役目は、狩に出たときやよその村との戦いにおいて指揮をとったり、しぜんの暦法によって農業を指導したり、神がかり的なことを村人に伝えたりすることであった。

関東から奥羽地方には、蝦夷（<sup>えぞ</sup>いまのアイヌ族）が住み、九州の南のはしには熊襲（<sup>くまそ</sup>）という先住民がいた。紀元一〜二世紀には、わが国に百あま



“ムラキミ”の想像図。

置は――

族長的貴族（または支配者）

山和地方の一土酋<sup>どしやう</sup>

部族同盟の長<sup>おさ</sup>

原始国家の首長<sup>しゅあう</sup>

のようなものであった。

山和の農耕社会に発生した新たな族長は、

オオキミ

スメラギ

スメラミコト

の名でよばれ、推古時代ごろになって、“天皇”という漢字が用いられるようになった（唐の高宗は、天皇と称した）。

りの小国家があったらしい（『前漢書』）。弥生時代（紀元前三世紀すえから紀元後三世紀ごろ）には、大陸にちかい北九州および中国地方西部（出雲<sup>いずも</sup>＝島根県東部）に、それぞれ勢力をもった一族があらわれた。

問題となる天皇家の先祖とみなされる――社会的に特権をもつ階級について、文献上その存在が証明されるのは五世紀の日本列島の記述『宋史』日本伝によってである。

――国王以王為姓 伝襲至今王六十四世 文武僚吏 皆世官（国王は王をもって姓となし、伝襲して今王<sup>きんおう</sup>「いまの天皇」にいたるまで六十四世、文武の僚吏「下級の役人」は、みな官を世々にす<sup>せげ</sup>「世襲する」<sup>(4)</sup>）。

山和<sup>やまと</sup>は、いまの奈良県にあたる地域である。四方、みどりの山にかこまれた盆地である。その盆地からおこった一村落の族長的支配者は、幾内を中心<sup>しん</sup>に各村を征し、やがて征服の輪をひろげ、四世紀半ばごろ日本をひとつの国にまとめあげ、山和国家をつくった。当時の天皇の位

注・伊豆公夫「天皇支配の成立過程」『新日本史講座「古代前期」』所収、中央公論社、昭和26・12より。



東大教授 重野安繹

が、この称号は、中国から取り入れたものらしい。<sup>(5)</sup>そして畝傍山<sup>うねびやま</sup>のふもと——橿原<sup>かしはら</sup>（奈良県中部）の宮において、はじめて天皇の位<sup>くらゐ</sup>についた人は、神日本磐余彦天皇<sup>かむやまといはれひこのみこと</sup>（＝神武天皇<sup>じんむ</sup>）といわれている（『くにのあゆみ 上』）。

日本国および皇室の起源は、このようなものであったと思われるが、維新後、敗戦の日まで、官学や私学、民間の歴史学者の著述は、日本史の第一ページを神話（神を中心にした説話）をもってはじめるのがふつうであった。

#### 一 歴史学者の皇国史観

たとえば重野安繹<sup>しげのやすつぐ</sup>（一八二七～一九一〇）、幕末から明治期の歴史家・漢学者。元薩摩藩士。維新後、修史局につとめ、のち東大教授）の『大日本歴史略説』（第一章～十四章まである）の冒頭の一節は、わが国は東洋中の島国であり、無数の島を領して国をなしている、といったのち、日本国の起源は、淡路の島に夫婦の神様がおりてきてからだとのべている（第一章 我日本建国の始<sup>はじめ</sup>）。

久米邦武<sup>くみたけ</sup>（一八三九～一九三一、明治期の歴史学者。元佐賀藩士。のち新政府につかえ編年史の編さんに従事。東大教授となるが、神道家・国家主義者の排撃をうけ東大をやめ、早大で教鞭をとった）は、

『稿 国史眼（一）（三）』（東大教授・重野安繹、星野恒<sup>ひさし</sup>らとの合著、明治23・9）を刊行している。同書の冒頭は、日本の建国（天孫降臨<sup>てんそんかうりん</sup>）の神の子孫が、天から人間界に降りてきた説話。いくつかあり、一つは日向の高千穂<sup>たかちほ</sup>峰に、二つは出雲に、三つは大和に、四つは淡路にそれぞれあったという話）のことからはじまっている。



## 第一紀 神人無別ノ世

第一章 國史ハ伊弉諾尊伊弉冊尊ニ始ル。ニ尊始テ礫馭盧

島ニ降ル。淡路小島是ナリ。八尋殿ヲ立テ之ニ居リ。大八洲ヲ

生成ス。

### 第一の記 神と人の別なき世のなか

第一章 わが国の歴史は、イザナギノミコト、イザナミノミコトにはじまる（この男女の神々は夫婦となる——引用者）。たつとぶべきお二人は、はじめてオノゴロ島にあまくだった。淡路の小島がそれである。ヤヒロノ神殿を立て、そこにお住いになった。大八洲（日本国の異称）がたてられた。

これは原文を意識したもののだが、さらにこのときから十五年ほどして久米は、俗伝（世間のいいつたえ）によるといい、日本の国土や国民は、もとをただと、イザナギ、イザナミから生まれ、それが富み栄えたもので、わが国は比類ない国であると自慢したが、このような話は、いまや科学のもとに烟ときえた、と神の国の由来を否定している（第三節 日本の原人『日本古代史』所収、早稲田大学出版部蔵版、明治38・7）。久米は、荒唐むけい（でたらめ）の神話を信ずる人ではなかったが、国体（国家の形態）の基礎をなす天皇家の神がかり的な起源をしりぞけることはできなかった。時は移り、文明の世が大いに進み、学問の研究が精緻になっても、天孫にまつわる神話はそのまま、にしておく必要があったようだ。

論文「倭韓共に日本神国なるを論ず」『歴学雑誌』第22編第1号所収、明治43・10）のなかで、久米は神によって開かれ、神の子孫がいまもつづく神国日本を礼讃している。

日本の偉らいのは、国の主権（天皇の力）は天つ神（高天原の神）の子孫が連綿として継承し給ふ神国であるから貴いので、日本神国とは誰が称へ

たかといふに、学者や神主たちが只斯く信じて命じたではありませぬ。……

竹越与三郎（一八六五～一九五〇、明治から昭和期にかけての歴史家・政治家）は、『二千五百年史 全』（開拓社版、明治29・5、この本はよく売れ、大正期までロングセラー）において、「真の国民歴史は、神武天皇より始まる」（六頁）といい、神話から語りだしている。

# 一 昭和天皇がまなんだ日本史

昭和天皇（一九〇一～八九、裕仁）がまだ親王（皇子の称号）であった十三歳から十九歳まで——大正三年（一九一四）の春から同十年春までの七年間——東宮御学問所（J R品川駅のちかくにあった）において、学友五名とともに

倫理	歴史	地理	法制	国語・漢文
博物	理化学	数学	フランス語	習字
美術	体操	馬術		

など十四科目習っている。が、教員の多くは学習院の教官や東大、高師の教授、軍人らであった。

歴史（「国史」「東洋史」「西洋史」など）を担当したのは、東大と学習院の教授をかねていた白鳥庫吉（一八六五～一九四二、明治から昭和期の東洋史学者）である。かれは「西洋史」だけは箕作元八（一八六二～一九一九、明治・大正期の西洋史学者。東大教授）のものを使用したが、「国史」と「東洋史」は、みずから執筆した教科書を使った（所功『国史』教科書・解説）。

白鳥本『国史』（全五巻）は、ほぼすべての章が歴代の主なる天皇の事績、知徳についてのべたものであり、神武天皇から明治帝までの由来を記述している。『国史』（巻一）の第一章は「総説」（日本帝国の領土、位置、民族など）であり、第二章は「神代」がくる。これは当時の一般的教科書のやり方を受けついだもののようなのだ。

昭和天皇は、皇統の継承者として、どのような日本史を学んだものか、ながく謎であったが、昭和六十三年（一九八八）夏——学友のひとり



架蔵していた特製の教科書（B5版、4号活字、濃紺表紙の和綴本五冊）が日の目をみることによって明らかになった。

第二章「神代」は、つぎのような文章ではじまっている。

一 天照大神

我が国には 上代よりいひ伝え来りし神代の物語あり、建国の由来、皇室の本源、及び国民精神の真髓、みな之に具はれり。其の説によれば 太古高天ノ原に 天御中主神、高皇産靈神、神皇産靈神の三神あり 其の後 伊弉諾、伊弉冉といふ男女の二神ありて 大八島（日本のこと）を経営し給へり。

田中巴之助著『日本国体の研究』（天業民報社、大正11・4）によると、わが国の国体は、世界が有する最大のはこりであるという。著者がいう国体とは、国の組織とか国がら、国の心ほどの意である。日本国には、どこの国にも例のない「神」がいるという。著者がいう神とは、宗教的な神ではなく、わが国の先祖なのである。日本国体の研究を世界に喧伝するために、この本を著わしたようだ。

上杉慎吉（一八七八～一九二九、明治・大正期の憲法学者。東大教授。天皇制絶対主義勢力の理論的、実践的指導者）は、日本国家をもって理想国家とした。いわく、「大日本帝国の建国は 天孫降臨の時に在る、……」（『国体論』有斐閣、大正14・9）。

同人によると、天皇は国民の大祭主（神官の長）であり、もし天皇が不在であつたら、日本の国家はないという。

永田秀次郎（一八七六～一九四三、大正・昭和期の内務官僚・政治家）の『建国の精神に還れ』（実業之日本社、大正15・2）は、一ヶ月で七刷したベストセラーである。が、これは建国祭を提唱し、国民精神を発揮することを目的とした宣伝の書である。著者によると、子どものときわが国の神話はあやしいものであり、価値なきものと思った。が、その後、神話はすべて、その民族の理想をかたるものであること、その貴重な所以を知ったという。

同人のことは意識すると、つぎのようになる。

——われわれは天祖の直系を本家とし、その傍系を分家とし臣として栄えた。皇室をのぞき、臣民のあいだはすべて平等である。貴賤貧富の差

があっても、われわれは神の子孫である。

著者は神代におもいをはせる時代錯誤者であった。

三浦周行（一八七一―一九三一、明治から昭和期にかけての歴史学者。史料編さん官をへて京大国史学科教授）は、神話や伝承の無批判的信奉者であった。かれは、日本という国は、神武天皇以前にさかのぼる世界最古の国である、と信じて疑わなかった（『建国の大精神』『国史事件論集』所収、有文書院、昭和7・6）。

辻 善之助（一八七七―一九五五、昭和期の歴史学者。史料編さん掛をへて、東大教授）の講演を集録したものが『皇室と日本精神』（大日本図書株式会社、昭和11・4）である。著者によると、日本帝国の国体は、天照大神の神勅（おつげ）をもとに立てられており、その理想は国民の理想として立てておるもので、「日本紀」（日本書紀の異称）のなかに書き現わされているという。また日本は世界の文化、文明の集合地であるという。

海外から輸入したいっさいの事物は、国体に適合すべく、同化された。わが国の文化の特質のひとつがこれだという。

皇室は国民文化の中枢に立ち、その核心であった。「その発展の中心として、御歴代の天皇が聖徳（ひじょうにすぐれた知徳——引用者）を磨かせるのにひじょうに御勉強なされ、御励精（勉強）なされたといふことが大きな原因であったと思ふ」（二六頁）。

#### 一 戦前の小・中学校の「修身」および「国史」の教科書にみられる指導理念

戦前の日本国民は——明治から昭和の終戦までの約八〇年間——小・中学校、専門学校、大学にいたるまで、神々が日本を開き支配した時代の歴史を、往古の事実として無批判的に受けいれるよう教育された。

つまり神話そのものが史実であり、日本国民は国家権力によってむりやり神話を信じ込まさせられたのである。

上から押しつけられた神話教育とはどのようなものであったのか、明治から大正、昭和期に刊行された修身や日本歴史の教科書（国定）にさぐってみたい。

明治五年（一八七二）——明治新政府は、江戸時代の旧弊な教育（寺小屋、藩校など）を刷新して、大・中・小の近代教育に移行するための

「学制」を公布した。旧来の寺小屋は、近代的な小学校へと変身した。

「修身」は、旧制の小・中学校の教科目のひとつであり、教育勅語（教育に関する勅語。明治23年「一八九〇」発布。昭和20年廃止）をよりどころとしており、じぶんの身を正しくし、善をおこなうよう努める道徳教育である。筆者が現物に接したものはわずか数種であるが、つぎにその内容にすこしふれてみよう。

『高等科用 皇民修身鑑 卷之三・四』（集英堂蔵板、明治25・10）の「第一」は、父母にたいする孝養を説いている。「第十三」は、国家にたいする愛国心と献身を説き、国民たるものはつねに義勇の心をやしない、国事に粉骨碎身せよといっている。

「第十四」は国体である。「我国ハ神代ヨリ、今日ニ至ルマデ、天皇仁（おもいや）リヨ以テ之ヲ統治シ……」てきたといい、建国以来、皇室の尊厳（とおとく、おごそかであること）は、富士山とおなじように不動であるという。「第十五」は尊王（天皇をたっとび、天皇中心に考えること）である。この中に「我国ノ民ハ、数千年ノ古ヨリ、我皇室ニ臣トシテ仕フルモノアリ」という文章がみられる。国民は尊王愛国を第一に心がけるように説いている。

渡辺政吉編『実驗 日本修身書 卷二 尋常小学 生徒用』（金港堂書籍株式会社、明治26・6）の「第一課」は、孝行とある。父母のおしえは、つつしんできくようにいつている。そして親の心にさからってはならぬという。「第十六課」は、皇恩である。神武天皇は、民のくるしみを救わんがため、日向（九州南東部）の宮をたち、山和の国に入ると、命にしたがわない者をうちたいらげ、天皇の御位につき、世を治め、民をいつくしんだ、という。

沢柳政太郎（一八六五～一九二七、明治・大正期の教育家。のち東北、京大の総長となる）は、中学校用の修身の教科書を著わしている。

『訂修 中学修身書』（同文館蔵版、明治42・10）。同書の冒頭にくるものは、「教育勅語」（朕おもうに我が皇祖……）である。「第十一」は忠良なる臣民（忠義で善良なる国民）である。国民としての道徳上のつとめは、忠君・愛国だという。忠君とは、服従と尊崇（うやまうこと）だという。そして六二〇〇万の日本国民は、みな至尊（天皇）や皇室に服従し、尊崇をあらわしているという。

このように修身は、身をおさめ、行いを正しくすることだけを教育目標としただけでなく、忠君愛国思想を植えつけ、君主をたっとぶ臣下をつくることにあったようだ。戦前に生れた日本国民なら、みな強制的に「修身」を教わっているはずであるが、生徒の反応はどうであったのか。

教える方の教師も、教わる側の生徒も、じつは修身の時間はたのしくなかったようである。明治二十六年（一八九三）四月——加賀百万石の富

山領の没落士族の家に生まれた富本一枝（一八九三～一九六六、大正・昭和期の女性運動家）の回想によると、教場の入口にかかっている「時間割」のなかに、『修身』の文字をみると、つまらなくなったという。修身の好きな子どもはいなかった。「私たち小さな子供は、修身の時間を敬遠した」という（「私の受けてきた教育——おもかげ」『教育』六月号所収、昭和24・6）。

つぎに明治初年から昭和期にかけて、小学校で用いられた歴史教科書（国史）をのぞいてみよう。

明治五年（一八七二）の学制下——小学校における歴史は、上学年の第四年生、第五年生から習うことになっていた。文部省がはじめて刊行した歴史の教科書は、

明治五年

## 史 畧

文部省

であり、一から四までの四冊本（一は皇国、二は支那、三は西洋上巻、四は西洋下巻）であった。この『史畧』の翻刻（原本のまゝ再版する）は、明治十年ごろまでに十三万部以上になったというから、歴史教科書としては最大の発行部数である。

第一冊目の『史畧』の「皇国」は、舌をかみそうな神々の名前——たとえば、アメノミナカヌシノカミ、タカミムスカミ、カムミムスビノカミ、イザナギノカミ、イザナミノカミ、アマテラスオホミカミなどが登場し、歴代天皇名を列記している。「皇国」は、いわば天皇歴代記でもある。

「人皇」（神武天皇以後の天皇の意）という見出しの書きだしは、神武である。

第一代神武天皇と申す鷦鷯草葺不合尊の御子なり 辛酉歲大倭檀原宮にして即位します 初め天皇日向より東征して都を中洲（やまと）に定めんとして 親ら皇族を帥て 名髓彦及び諸の賊を誅伐し 遂に大倭（山和の国）に入 宮殿を营造して 帝位に即たまふ

「皇国」は、生徒に暗誦させるために（「例言」）、やさしく書き、さし絵も添えているが、こんにちから見ると、じつに読みづらい本である。  
『史畧』の「皇国」編は、各県でも翻刻されている。筆者がみたものは、和歌山と山梨県のものだが、前者は明治七年（一八七四）に刊行されている。後者は刊行年不詳である。和歌山本の表紙の題せんには、つぎのようにある。



山梨本の題せんは、「官版改正再刻 史畧 皇国 一」となっている。『史畧』（文部省、明治5）では、むずかしい天皇の名のよみ方にはルビがふつてあるが、山梨本ではそれがけずられ、代わって句読点が入れている。

第一代、神武天皇と申は、天照大神五世の孫なり、  
鷺鷥草葺不合尊の皇子なり、天皇東征して都  
を中洲に定めんとし、日向を發し、長髓彦、及び諸  
の賊を誅伐し、辛酉、歲、大倭橿原の宮に入りて、帝位  
に即るまふ、

師範学校編輯『日本畧史』（文部省刊行、明治8～9）も、小学生のための日本史である。上下の二冊本（和装）であり、上巻は明治八年（一八七五）十一月に、下巻は明治九年（一八七六）六月に刊行されている。筆者がみたものは、上巻のあと版（明治九年<sup>不明</sup>月刊）である。

本書は、第一代の神武天皇から、第二百二十二代の今上天皇（いまの天皇）明治帝「一八六七～一九一二」までの歴史を描いている。『史畧』（文部省、明治5）では、神代からはじめ、「人皇」として神武天皇の名をかかげているのに反して、『日本畧史』では「第一代神武天皇ハ……」の文章ではじまっている。

この神武天皇は、あまてらすおおみかみ五世の孫であり、ウカヤフキアハセスノミコトの子ともだという。

伊地知貞馨編輯『小学日本史略 全三冊』（有恒齋蔵版、明治13・3）は、上下二冊本から成る小学生用の日本史の教科書である。筆者がみたものは上巻であり、タイトルが『小学日本史略 上』となっていて、あと版である。明治十三年（一八八〇）三月の刊行である。

本書は、さきにのべた『日本畧史』とおなじように、天皇の年代記である。はじめに「神代」がくる。ついで「人皇第一代」（神武天皇のこと）が来、百二十二代の明治帝まで叙述されている。

笠間益三編纂<sup>撰</sup>『新日本略史』（中近堂蔵版、明治13・3）は、長崎県士族・笠間益三が編集したものである。初版は明治十三年（一八八〇）年三月に刊行された四冊本である。<sup>(6)</sup>これも小学校の生徒のために教科書として編まれたもので、どちらかといえば従来の天皇の歴代史というより、事実の起った順にしるした編年史的な本である。

筆者がみたものは、初版であるが、高天原を支配する天照大神（<sup>あまてらすおおみかみ</sup>記紀神話の最高神）からはじまって、第二百二十二代の明治帝までのべてある。小幡篤次郎（一八四一～一九〇五、元中津藩士。慶応義塾にまなび、幕府の開成所の英学助教をへて実業家、慶応の塾長に就任）は、――

『小学歴史 巻一』（検定本）

を刊行している（明治20・3）。発売所は金港堂の本店および支店である。

本書はさし絵入り本であり、「神武天皇<sup>在位七十六年</sup>。紀元元年天皇<sup>かきはら</sup>橿原ノ宮二即位ス」といった漢字とカタカナ文からはじまっている。この天皇は天照大神の神孫であり、日向<sup>ひうが</sup>の高千穂から兵をひきいて諸国を平定し、山和に入りナガスネヒコを誅し、天皇の位についたという。これも編年史的な本である。

岡本監輔<sup>かんすけ</sup>（一八三九～一九〇四、幕末から明治初期の漢学者。大学予備門、一高の漢文講師。のち台湾総督府国語学校教授）は、小学生用の歴



史教科書を編んでいる。『国史紀要』（出版者 三浦源助、明治20・2）がそれである。小学校の教則綱領にしたがって編んだといい、「小学史料」の大意だという。どちらかといえば編年史的な本である。治乱（世のながが治まること、乱れること）の原因を明らかにして、読者（学童）に忠愛の心をおこさせるのが目的であったようだ（「例言」）。

同書は「建国体制」からはじまり、わが大みくには天祖である天照大神が創始したものだという。第一代の神武天皇は、この神の五世の孫だと述べている。本文は漢字とカタカナから成る。

#### 小学校教科用書

#### 高等小学歴史

#### 文部省総務局図書課

は、文部省が公募した教科書のなかから、内容のすぐれたものを何部かえらび、総務局図書課で更訂（本の中味を正す）し、文部大臣の裁定を経て明治二十四年（一八九一）三月に刊行したものである。

この本によって、小学校の上級生に、本邦の歴史のあらましをおしえ、忠君愛国の志気を奮起させ、徳性を涵養するのが目的だという（「緒言」）。第一篇は、総論・地理・政体などについてのべ、ついで、皇室略記がくる。皇統（天皇の血統）は、遠く天照大神から出ているという。天祖はニニギノミコトを豊葦原のなかつ国（日本の古名）に降臨させるとき、三種の神器をあたえ、とよあしはらのミズホの国（日本の古名）は、わが子孫が王として治める土地である、と申されたという。

『小学校用 日本歴史』（金港堂書籍株式会社、明治26・10～27・1?）は、小学校の第三、第四年生用に編まれた教科書である。同書は前編、後編、外編の三冊本からなる。筆者がみたものは後編である。前編は国の起源より現代までの史談（歴史上の物語）や故事来歴（むかしから伝っている話）などを集録しているようだ（「例言」）。後編は前編において略述したものをよりくわしくのべ、また本編において省いたものもあるという。

後編の第一章は、「神武天皇以前」となっている。諸子（みなさん）は、すでに前編において多くの史談を聞き、わが国のむかしからの事蹟を知り、その変革のあらましを知っているはずである。いまから立ち帰って、さらにくわしく、国がはじまって以来の事歴を話すことにする。

どこの国でも、太古（たいにこ おおむかし、有史以前のこと）のことはよくわかっていないのである。だからわが国の先住民については知ることができないのである。古い記録によると、「つちぐも」と呼ばれる穴居し、性凶暴の民がいたことがわかる。また東北諸国には、アイヌ人がいる。これ

らの野蛮人には酋長がいて、たがいに物をうばったり、戦争をしたりしている（原文の意訳）。

山県悌三郎著『ていざぶろう帝国小史』（文学社、明治25・6～同26・12）は、甲号二冊、乙号四冊の全六冊本である。小学校教則大綱にもとづき、日本史の教科書として執筆したという（「凡例」）。

本書は全八篇八十八章から成り、神代より今上天皇（明治帝）までを記述したものである。乙号の「緒言」において大日本帝国の地理上の位置についてのべたあと、わが国は開びやく（天地のはじめ）以来、こんにちに至るまで万世一系の君（天皇）をいただき、また外国からあなどられたことはないという。これはじつに世界において比類ないことであり、世界にむかって誇ってよいことである。

われわれは皇祖祖宗（天皇の先祖）の遺訓と遺業をしるした自国の歴史をよく記憶して、むかしからいままでの国勢（国のありさま）の沿革を知り、また古人の事蹟をみて、その美風をうけつぐことによって、日本国民としての本分をつくし、祖先をはずかしめないように努めねばならない（本文の意訳）。

ついで第一篇 第一は、「神代の概略」、第二は「神武天皇の創業」となっている。「神代の概略」には——はじめてこの世に現われた神は、アミノミチカ不明シノカミといい、つぎにタカミムスヒカムミムスヒの二神があらわれた。これを造化（天地万物を生みだす）の三神という。その後だいぶ時がたち、イザナギイザナミの男女の二神があらわれ、大八洲の国をおつくりになり、アマテラスオオミカミとスサノヲノミコトとお生みになった。これは日本創始の祖神である（本文の意訳）。

高津嶽三郎  
三上参次  
磯田良 編纂『にほんれきし教科書』（大日本図書株式会社、明治27・7）

は、明治二十六年（一八九三）アメリカのシカゴで「コロンブス世界博覧会」が開設せらるるにあたり、わが国の博覧会事務局は、かんたんな日本史を編み、特異なる国体と文化の由来を外国にしめそうとくわだて、その編述を高津・三上・磯田の三人に委嘱した。稿がなるや、『ジャパン・メール新聞社』に英訳してもらい、それをシカゴの博覧会に出品した。

『にほんれきし教科書』は、上中下の三冊本である。上巻の目次は、つぎのようになっている。

## 總論

### 第一節 地理……………一丁

### 第二節 國體 皇室と人民……………五

## 第一編 政事帝室より出でし時代

### 第一章 神代史

諾丹二尊 天照皇太神 素盞鳴命 大國主命……………七

日向箕都……………七

### 第二章 神武天皇より大化の改新に至る

#### 第一節 神武天皇の東遷……………九

#### 第二節 神武天皇の御代前後の政事及び世態……………一二

「総論第二節 国体 皇室と人民」は、建国および皇室の由来、臣民などについてのべている。わが国の建国は諸外国のそれとことなるという。数千年まえにわが皇宗は、国内の蛮族を徳化と威力によって帰伏させたことによって日本が生まれた。

また天祖の天照大神は、天孫を天から地上にさしつかわすことによって、代々この国を統治させた。天皇は人民を撫育し（かわいがって育てる）、人民は天皇を敬愛しているので、両者のあいだには君臣の関係、親子のような関係が存在している。皇室はわが国の宗家（本家）であり、各氏族は天皇家の一門のようなものである（原文の抄訳）。

「第一編 第一章 神代史」において、人皇（神代にたいして人代となつてからの天皇）のはじめを神武天皇といい、位を正しくして皇国に君臨したという。それ以前を神代という。神代についての伝説は、神異（ふしぎなもの）であるので、こんにちの人には理解できないものである（原文の意訳）。

『小学日本歴史』（金港堂書籍株式会社、明治27・12）。

同書は前編、後編、外編の三冊本からなる。この教科書は高等小学校の第三、第四年生用に編まれたものである。

前編は国の起源より現代までの史談をさすけようとしたもので、後編はそれを略説し、または省略したものも少なくないという（「例言」）。この教科書はタイトルこそ異なるが、『小学 日本歴史』（金港堂書籍株式会社、明治26・10～27・1?）のあと版のようである。

『小学日本国史』（金港堂書籍株式会社、明治32・8～33・1）は、第一巻から第四巻までの四冊本である。一巻と二巻は、高等小学校の第一年生と二年生がまなび、三巻と四巻は第三年生と四年生が用いたようである。筆者がみたものは、中根 淑（なかね きよし）（一八三九～一九一三、漢学者、旧幕臣のち文部省編輯官）が著わした『小学日本国史 巻三』である。

「第一章」は、「太古」（たいこ）（おおむかし、有史以前のこと）となっている。わが国の古代についてくわしく知ることはできないが、古書（日本書記、古事記?）がしるしているところと、国家の宝物と地中から掘りだした器物によって、その大略を知ることができるという（原文の意訳）。

おおむかしに現れた聖智の人（天子）は、後世よりみな神とよばれた、といい、このあと神々の名前がつづく。

普及舎編輯所編『小学国史 二箇年修業  
高等小学校用 巻一』（普及舎、明治33・10）。

本書は、小学校令施行規則にもとづき、修業年限二カ年の高等小学校歴史科の教科書として編んだものという。二冊本か。

この本に記載されている事実は、正確なものであることはいまでもなく、また行文（こうぶん）（つくった文章）はやさしく明快であることを旨としたという（「緒言」の意訳）。

「第一課」は、天照大神である。「伊勢まいり」といって人々が詣でる伊勢の大神宮は、天皇陛下のご先祖であるアマテラスオホミカミをまつているお宮である。この大神は徳きわめてたかく、たかまがはら高天原をおさめ、田をたがやして穀物を取り、カイコをやしない、絹をおり、やすらかに世をわたる道を人民におおしえになった、という。

このあとスサノヲノミコト、ニニギノミコト、神武天皇、日本武尊（オウスノミコト）、ヤマトヒメノミコト、神功皇后などが登場する。

右文館編輯所編『高等  
小学 補習日本歴史』（右文館、明治33・11）。

これは高等小学校の補習授業用の教材のようだ。第一編の建国の概略にはじまり、第十三編の明治の世でおわっている。第一編（一）の建国の概略には、つぎのようなことがしるされている。おおむかし、あまてらすおおみかみ天照大御神は孫である「にぎのみこと」にわが国と三種の神器をあたえ、この国に降ろしました。「にぎのみこと」は、命を奉じて、日向の高千穂峰におり、世をしらしめたまいき（お治めになった）。このみこと（神）から四代目の君（きみ）（天皇）を、神武天皇ともうします（原文の意訳）。

『歴史教科書』（帝国書籍株式会社、明治35・1）。

同書は版元の帝国書籍が、現行の小学校令および同令施行規則にもとずき、高等小学校歴史科の小学生のために編んだものであるという。全四冊からなる。

本書は皇統の万世ばんぜい一系いつけい（天皇の血統が永遠にわたって変らずつづくこと）のしだいをおしえ、年代と事蹟との関係をあきらかにし、巻末にかなんな歴代年表および天皇継統表を付したという（「凡例」）。

巻一は第一課から第十五課までである。「第一課」は、「天照大神アマテラスオホミカミ」である。いわく――

伊勢の大神宮にまつてある天照大神は、わが天皇陛下のご先祖であられる。オホミカミは徳がひじょうに高く、高天原タカマハをおさめ、田をたがやし、機はたをおりなどして、安らかに世をわたる道をお教えになりました（原文の意訳）。

これまでは小学校用の日本史の教科書の内容についてその要点をぬき出してきたが、つぎに旧学制下の男女の中等教育機関――中学校や女学校のテキストについて述べてみたい。筆者は明治四十年代に刊行されたものを何冊か実見する機会があったので、それらについてふれることにする。

文学士 野村浩一編『国史綱要 全』（明治書院、明治42・4）。

この教科書の初版が刊行されたのは、明治三十年代か。よく売れた本で筆者がみたものは十六版である。本書は、中学校の国史科の第五年級用に編さんしたものである。

初年級でまなぶべき事実は、なるべくこれを省略し、おもに制度・文物・外交などについて叙したものである。古代はかんたんに、国史事実は概括略述し、近代は詳説したという（「例言」）。

本書は第一章から第二十九章までである。第一章は「建国ノ体制」である。いわく、大日本建国の基礎は、遠く神代にあり、神武天皇に至ってその体制が大いにととのったと。はじめ天照大神は皇孫ニギノミコトに三種の神器をさずけ、降臨させたという。

東京帝国大学  
史料編纂官  
文学士 藤田 明著『中等日本歴史』（宝文館蔵版、明治44・12）。

本書は、中学ていどの学校における上級用の日本歴史教科書として著わしたものである。この教科書は第一章から第三十七章までである。前半は



『史畧 和歌山縣翻刻』  
(明治7年)にみられる“天孫降臨”のさし絵。

おもに大勢の推移、文化の発達、外国との関係について説き、後半は明治および現代史を詳述したという（「例言」）。この本も先の藤田 明の『中等日本歴史』とおなじように、第一章は「建国の体制」である。

一 光輝ある国史 わが国は、太平洋上の一小島国にすぎないが、世界に無比の国体と比類ない国史をもっている。上には万世一系の天皇があり、日本を統治し、下には忠良なる臣民がいて、徳化に服し、ここに二千五百年あまり、東洋の海表（外国）よりもはるかにすぐれ、いちども外国からあなどられたことはない。優美なる風土と高潔なる特質とをもって、光輝ある国史は成立したという。

二 建国の体制 あらたに国をたてるとき、天祖天照大神は、天孫ニギノミコトをこの大八洲国にくだすにあたり、豊葦原の千五百秋の

瑞穂の国（あしが生い茂って、千年も万年も穀物がゆたかにみのる国）日本国の美称）は、わが子孫が天子として治める地である、と仰せになった。

三 日本国民 おおむかしこの日本に、えびす・くまそ・つちぐもなどの蛮族が住んでいたが、小部落にたてこもるにすぎず、国民的の団結をしていたわけではない。が、天孫が降臨なされてから、これらの蛮族も服従し、その後皇化（天皇の仁政）をした、また中国や朝鮮から帰化したものも融合同化して、ついにこのしっかりとした国家ができた。

四 皇室と臣民 日本国民は、一大家族のようなものである。宗家は皇室である。天皇は宗家の長であり、諸族はその支族のようなものである。皇室と臣民との関係は、もっとも親密であり、父子のようなものである（原文の意訳）。



田島教恵著『女子日本帝国史 上巻』（東京 興文社、大阪 前川書店、明治45・3）。

本書は、著者が先に出版した『女子帝国史』を改訂し、高等女学校用の教科書として著わしたものである。これは上下の二冊本か。著者によると、世に出まわっている国史教科書のなかには、おうおうにして高尚にすぎ、またありふれたものもあるという（「緒言」）。筆者がみた上巻は、大別すると、

第一編 太古史 第二編 上古史

第三編 中古史 附録（歴史年表、歴史歌集）

から成っている。

第一編 太古史

皇基こうきの遼遠（皇国の基礎ができたのは、はるかむかしのことの意味か）

——わが大日本帝国は、万世一系の天皇をいただき、開びやく以来いちども外国のあなどりを受けたことのない、世界無比の国体である。わが国を造ったのは、イザナギノミコト、イザナミノミコトである。そのお子が、天祖アマテラスオオミカミであられる。

大神は高天原たかまはらを治めたが、威徳いとく（おごそかでおかしがたい徳）がひじょうに高く、農耕・養さん・はたおりの業をおすすめになった。

大神の弟のスサノヲノミコトは、勇猛であり、出雲におりと、土地に害をなすものをのぞき、また韓国にも往来して、殖林もおこした（原文の意訳）。

さいごに軍関係の学校で用いられた日本史の教科書についてのべてみたい。

陸軍幼年学校は、帝国陸軍の将校となるべき者を教育するところであった。明治二年（一八六九）に設けられた陸軍兵学寮幼年学舎を起源としている。仙台・東京・名古屋・大阪・広島・熊本にあった。修業期間は三ヵ年。中学一年ないし二年修了者が受験資格者であった。戦前の軍関係のエリート校であり、生徒はこの学校を卒業後、陸軍士官学校にすすんだ。

幼年学校の教科は、国漢作文・外国語（フランス語、ドイツ語、ロシア語から選抜）・歴史（本邦史Ⅱ日本史、西洋史）・数学・理科・図画・倫理などであった（「教授部課程細目附表」より）。

軍隊の強弱は、将校のよしあしやかれらが受けた教育の良否によるといい、体力と知力をやしない（第一条）、尊皇愛国そんこうの心情を養成すること

を教育方針とした（「陸軍幼年学校教育綱領」大正4・9・15  
教育總監達）。

この学校では、日本史や国史といった語を用いず、「本邦史」といったことばを使っている。筆者がみたものは、昭和十一年（一九三六）一月に印刷（刊行）されたもので、表題は――

陸軍幼年学校編纂
本邦史教程 全
陸軍幼年学校用

となっている。全四百十三頁。地図がたくさん入っている。目次を略記すると、――

緒説	第一編 太古 第二編 上古 第三編 中古
	第四編 近古 第五編 近世 第六編 現代

となっている。

緒説（本論に入るまえの出だしの論）は、従来の日本史によくみられる記述をうけつぎ、建国の体制からのべ、「我ガ大日本帝国ハ 上二万世一系ノ天皇アリテ 蒼生（万民）ヲ愛撫シ給ヒ、下ニ忠良ナル臣民アリテ 君国ニ報効シ（力をつくす）、国体ノ尊厳ナルコト（たつとくおごそかなこと） 世界ニ比類ナシ」という。

ついでわが国は、天神（天の神）がおつくりになったものであり、天照大神が皇孫をこの国にくだし、統治させたという。世界に国はたくさんあるが、日本のように完全に美しい国風あるをみないという。天祖がひらいた国のもとい（基礎）は、遠いむかしからずっと変っていない。

皇国（天皇が治めるくに）の干城（軍人）たるべき者は、社会の浮薄の風潮にそまることなく、皇謨（天子のもくろみ）をたすけ、光輝ある

帝国の歴史をはめたたえることに努めるべきである（総説）。

# 一 絶対主義君主制の樹立

江戸中期から明治初年にかけて、わが国の士庶（武士と庶民）のなかに“世なおし”（世の中の改造）を求める者があらわれ、かれらは反権力、脱体制的意識、高い志などをもって国事に奔走した。これが維新の原動力になった。

十五代将軍の追いおとしに成功した新政府は、討幕派諸藩の下級武士と公卿の寄りあい所帯にすぎなかったが、明治元年（一八六八）閏四月二十七日——政体書（政体組織法——冒頭に“五箇条の御誓文”がくる）を公布した。この布達によって旧幕府にかわって一切の権力が、

太政官（明治政府の最高官庁。その下に諸部局を属させた）

に集中することになった。

従来の国家の機構（しくみ）は、——

摂政（天子に代わって政治をおこなう人）——関白（天皇を補佐して政務をつかさどる重職）——将軍以下の職から成っていた。が、あらたに

総裁（親王＝皇族）

議定（親王、公卿、諸侯など）  
参与（公卿、諸侯、徴士＝諸藩の代表者）

の三職がおかれた。明治新政府は統一のない、雑多な人間のあつまりから出発したのであるが、その方策としたものは、“王政復古”（旧王朝政治の復活）であった。しかし、「王政復古」といっても、古代の天皇制にもどることではなく、どちらかといえば、新たに絶対主義的な君主制を創設することであった。

幕藩体制を解体することに大きな働きをした薩長土肥の志士らは、政府の要職をしめ、藩閥官僚政府をつくったのである。が、かれらはじぶんたちがにぎった政治権力を維持し強化するために、古代天皇制の権威をもちだし、民衆のうごきを押しつぶし、天皇を君主としておおぐ統治体制を構築した。かれらは天皇を中心とする「国体」（国家形態）を神聖不可侵のものとした。

国体はやがてわが国の支配階級によって、ますますおごそかで犯しがたいものにしたてあげられていった。支配権力はすべての教育機関やマスコミ（新聞、雑誌、ラジオ）を通じて、国体の神聖さやその世界無比なることを喧伝した。

戦前の一般的考えからすれば、天皇<sup>8</sup>は国家であり、教育は国家へ奉仕するためのものであった。「大日本帝国憲法」（いわゆる明治憲法、明治22<sup>11</sup>一八九九公布、昭和22<sup>11</sup>一九四七・五まで実施。政府の権限のつよい欽定憲法）につづいて、「教育勅語」（明治23<sup>11</sup>一八九〇公布、昭和23<sup>11</sup>一九四八失効。国民として守るべき徳目をかゝげ、危急のばあいは、義勇をもって国家や天皇のために尽くすのが本分であると説いたもの）が發布した。

この二つは、わが国の国家主義的歴史教育に大きな影響をあたえたと考えられている。日本国民は、とくに「大日本帝国憲法」の第一条と第三条によって、天皇が代々この国を統治し、その存在は神聖不可侵であることを知るのである。が、一般の民衆は絶大な天皇の権力と権威をどこまで認識していたか疑問である。

「教育勅語」の眼目は、天皇にたいする忠君愛国主義であり、儒教的な家族道徳は二次的なものであった。天子をかつぎだし、御座にすわらせることに成功しても政権維持はつねに不安定なものであるから、為政者は、天皇支配をいつまでも存続させるために、天皇を神格化する必要がある。かれらは封建時代に信じる者がすくなかった「日本神話」——わが国は神国である。天皇も国民も神の子孫であり、日本民族はすぐれた民族であるといった考え方——をもちだし、それを国史教育の中核とし、小学校の児童や中学・高女にまなぶ生徒らに強制的におしえ込ませた。すなわち、天皇神格化への道がはじまったのである。天皇制への無条件服従を確保たるものにするために、全国民は学校において、「御真影」（天皇と皇后の写真）へ最敬礼し、「教育勅語」の奉読をつつしんでいたり、あるいは「君が代」をうたわされた。

神話をあたかも事実として教えられると、天皇家の系譜や神裔（神の子孫）について科学的に研究することができなくなり、その道がふさがれることを意味した。

太平洋戦争がおわるまでのわが国の歴史教科書は、小・中学校において、およそ神代の記述からはじまるのがふつうであった。すなわち「国

史」の第一ページは神話が叙述されており、そこには神話への懷疑や批判はみじんもみられなかった。<sup>(9)</sup> 天皇＝国体は、神聖なものであり、それを信仰しないということは皇室にたいする不敬にあたった。

戦前の中学では、教育勅語は暗唱させられ、ときに教師が国体の精華<sup>せいけ</sup>（すぐれた点）について講釈した。日本国民は、天孫民族でなく、サルが進化してできた原始人類の子孫というべきところ、なにを血迷ったのか、神のすえ（子孫）であり、世界でもっともすぐれた民族であると教え込まれた。

政府が教育を通して、尊王主義や国家主義をおしつけたのはなぜか。一つには国民に戦争政策を支持させるためであった。大陸侵略をめざし（日清戦争の準備のため）、教育もその目的にそうようにし、国家主義、軍国主義的傾向をつよめていき、日露戦争後（明治38＝一九〇五）、わが国の資本主義はついに帝国主義的（政治的、経済的に他民族または国家を支配して強大な国家をつくろうとする）段階に入った。<sup>(10)</sup>

やがてわが国は、国粹主義的社会政策を強調しつつ、対外侵略政策をとるようになり（つぎの戦争準備に入った）、満州事変（昭和6＝一九三二）以後、国防国家へむけての動きが活発化し、国際連盟を脱退した昭和八年（一九三三）には、小学校で用いられる「国語読本」や「修身書」において、国家主義・軍国主義が強調されるようになった。

満州国（昭和7＝一九三二、満州事変を機に、日本が満州につくった国）の建国が宣言されたあと、「東亜新秩序」といった標語<sup>るーگان</sup>があらわれるのだが、「忠君愛国」の化身として「忠犬ハチ公」が、昭和十一年（一九三六）の国定教科書『尋常小学修身 卷之二』に登場した。<sup>(11)</sup> またこの年、ラジオから流れる国民歌謡も軍国調のものになっていった。

昭和十二年（一九三七）五月——文部省編纂による『国体の本義』二〇万部が発行され、全国の小・中・高・専・大学をはじめ、各図書館、官庁へも配布された。これは皇国史観にもとづく国体論をいっばん国民にわかりやすく説いたもので、昭和十七年（一九四二）四月まで一〇三万部刷り、<sup>(12)</sup> 全国にくばった。

折から国体明徴運動<sup>めいちょう</sup>——天皇を中心とする国体観念をはっきりさせる教化運動。その中心勢力は軍部、在郷軍人会、右翼団体であった——が、はげしくなった。これは文部省が「国体を明徴にし、国民精神を涵養<sup>かんよう</sup>振作」<sup>(13)</sup>（国体をはっきりと証明し、国家のために自己を犠牲にする精神を養成すること）を目的に編んだものであった。「緒言」には、つぎのようにある。



天皇の観閲式のスケッチ

——明治維新後、七〇年わが国はこんにちの盛事<sup>せいじ</sup>をみるにいたったが、国体の本義（ほんとうの意味）ははっきりしていない。いま直面している思想上、社会上の弊害、たとえば社会主義・無政府主義・共産主義などは、個人主義を基調とする西洋の近代思想によるものである。日本国民は個人主義を克服して、国運の伸展に貢献するところがなければならぬ（原文を意識したもの抄訳）。

「第一 大日本国体」では、天皇が大日本帝国を統治するのは、皇祖の神勅によるとしている。「第二 国史における国体の顕現<sup>けんげん</sup>（あらわれる意）」では、わが国における国史は、国体といったであり、国体の自己表現であるという。「結語」においては、諸問題の原因となっている外来文化を純化し、国体にもとづきあたらしい日本文化の創造につとめるよういつている。

昭和十四年（一九三九）五月二十二日——内地および外地の中等学校以上にまなぶ一八〇〇校の代表三万二千五百余名の生徒、学生は、宮城前において午前十時から、銃をかつぎ、帯剣、ゲートルをまき、天皇のまゝで武装行進をした（「全国青年学校生徒御親閲式」）。すでにわが国の教育は、戦時体制に組みこまれていた。また同年九月には、中等学校の筆記試験は廃止となり、小学校長の報告書・口頭試問・身体検査などによって合否がきまった。

昭和十五年（一九四〇）二月二日——民政党代議士・斎藤隆夫（一八七〇—一九四九、大正・昭和期の政党政治家、早大をへてエール大学にまなぶ。弁護士）は、満三年をむかえようとする日中戦争をめぐり、「聖戦」（正義のたたかい）に疑問を投げた反連演説をおこない、満場の拍手をえたが、のち議員を除名になった。

同年七月、第二次近衛内閣が成立した。同月二十六日にひらかれた閣議において、「八紘<sup>はっこう</sup>一宇<sup>いちう</sup>」（全世界を一つの家のように統一するの意）の精神にもとずき、大東亜新秩序を建設することを基本国策とすることに決した。八紘一宇は、軍国主義のスローガンとなった。

十一月十日——宮城前広場において、政府主催の「紀元二六〇〇年記念式典」（神武天皇が橿原宮<sup>かしはらみや</sup>で即位して、二六〇〇年にあたることの儀式）が開催され、祝賀は五日間つづいた。



昭和十六年（一九四一）一月八日——陸軍大臣・東条英機の名で、全陸軍に『戦陣訓』が告示された。これは兵士が死にのぞんでの哲学、命令への絶対服従、捕虜のはずかしめをうけぬよう、生きて軍人として守るべき訓諭<sup>くんゆ</sup>をのべたものである。

「本訓<sup>ほんくん</sup> 其の<sup>そ</sup>一<sup>いち</sup> 第一 皇国」の書きだしは、「大日本は皇国なり。万世一系の天皇が上<sup>かみ</sup>におはしまし……」とある。

同年四月一日——明治以来七〇年にわたって親しまれてきた「小学校」は、名称をあらため「国民学校」となり、昭和二十二年（一九四七）までつづいた。義務教育年限は、初等科六年と高等科二年の八年間であり、年齢は六歳〜十四歳までであった。国民学校は、皇国民が、心身を訓練するための錬成道場のようなところとなった。

教科は——

国民科……………修身	国語	国史	地理
理科……………算数	理科		
体錬科……………武道	体育		
芸能科……………音楽	習字	図画	工作
			（女子のみ）裁縫 家事

などから成っていた。

生徒は登下校のとき、「奉安殿」（天皇と皇后の写真、教育勅語などを保管する建物）に最敬礼することを義務づけられた。

国民学校は、軍隊とおなじ命令・服従・体罰が課せられ、武道は必須、団体行進、手旗信号・作業などをおこなわせ、太平洋戦争がはじまると、軍事教練・救護・看護訓練・防空訓練などもやらせた。

国民学校は、ますます国家主義的色彩をつよめていった。

その顕著なあらわれが、国民学校の低学年用に新たに編修された国語の教科書である。たとえば『初等科国語』（文部省、昭和17・2・7、上下二冊）をみると、皇国民としての自覚を強調するかのよう——神話のほか、戦意高揚などを狙いとする軍国色のこい話などが盛りこまれている。

『初等科国語 一』（文部省、昭和17・2）は、二十四課から成るのだが、神話や軍国調のものをひろくと、つぎのようになる。

- 一 天の岩屋……天照大神は、天の岩戸へおはいりになって、岩戸をおしめになると、明るかった世の中が急にまっくらになり、外にお出ましになると、再びもとのように明るくなったという話。
- 六 八岐のをろち……すさのおのみことの大蛇退治の話。
- 十一 少彦名神……大国主神が出雲の海岸でみた、豆のさやに乗った小さな神の話。
- 十三 にいさんの愛馬……軍用馬となった兄の愛馬の話。
- 十八 カッターの競争……海軍記念日における、海軍カッター競争の話。
- 二十 にぎのみこと……にぎのみことは、天照大神がいったとおり、日本の国を治めたという話。
- 二十二 軍犬利根……もらった小犬が大きくなり、りっぱな軍用犬になったという話。

同書の二（文部省、昭和17・7）も、二十四課から成る。この版も神話と陸・海軍を材料にした話がおさめてある。

- 一 神の剣……神が天から落とした剣を神武天皇がうけとった話。
- 七 潜水艦……潜水艦の艦長が、おいに潜水艦乗組員となってお国のために奉仕することを勧める話。
- 十四 軍旗……天皇から授った軍旗を讃美した話。「天皇陛下のみいくさに、いつでも勝ってがらをたてる、わが陸軍のはまれの軍旗」という。

二十一 三勇士……昭和七年（一九三二）二月——中国戦線において、三名一組の工兵が破壊筒をもって敵陣の鉄条網を爆破し、戦死した話。

# 一 太平洋戦争の勃発

昭和十六年十二月一日——御前会議において、対米英蘭にたいして開戦を決定し、軍令部総長・永野修身（二八八〇～一九四七、敗戦後A級戦犯に指名されたが、裁判中に病死）は勅命により、山本連合艦隊司令長官に左記の命令を下達した。

永野はアメリカやイギリス相手の戦争に勝てる自信はなかった。この年の七月三十一日天皇が永野軍令部総長をよんでご下問があったとき、日本海海戦のような大勝はもちろん、勝ちうるかどうかもおぼつかない、と答えた。わが国は結局はなはだたよりない見透しのまゝ、捨てばちの戦争を開始した（「捨てばちの戦争」『真相』特集版・第2集所収、昭和23・10）。

戦争回避の日米交渉はぎりぎりまでつづけられたが、アメリカ側は東条内閣の登場によって態度を硬化させ、日本軍の中国撤退、南部仏印（サイゴン）からの撤兵をもとめるハル国務長官の最終案（ハルノート）をしめた。しかし、これは日本政府の容れるところとはならず、十二月八日日本はついに対米英戦に突入した（「朕ココニ米国及英国ニ対シテ戦ヲ宣ス」——太平洋戦争の開始）。

アジアにおいてくり広げられた太平洋戦争は、古今未ぞうの大戦争であり、数年にわたり中国大陸、南洋の島々、フィリピン、マレー、インドネシア、タイ、ビルマ、インド、オーストラリアまで戦禍はおよんだ。太平洋戦争は、日本海軍によるハワイ真珠湾急襲によって始まるのだが、これは天皇の宣戦に先んじておこなわれ、国際法に違反するものであった。

わが国はこの戦いを「聖戦」とよび、「東洋の新秩序」や「大東亜共栄圏<sup>だいとうあきょうえいけん</sup>」の建設のためと大言壮語し、日本・満州・中国を中心に、アジア諸国との共存共栄を主張した。しかし真のねらいは、欧米諸国にかわって日本がアジアを支配することであった。

「大東亜共栄圏」なることは、第二次近衛内閣の外相・松岡洋右（一八八〇～一九四六、大正・昭和期の外交官）が昭和十五年八月ごろに用いた造語であり、日本の南進策のスローガンになった。<sup>(13)</sup>

太平洋戦争の戦争目的は、この大東亜共栄圏の建設にはかならなかった。

開戦当初、日本軍は破竹のいきおいで東南アジア各地を占領したが、翌十七年（一九四二）六月のミッドウェー海戦の敗北、十八年（一九四三）のガダルカナル島からの撤退、アッツ島の全滅などによって、以降戦局は劣勢にむかった。やがて国民は総力戦体制に組みこまれていった。彼<sup>ひが</sup>我が国力、戦力の差ははっきりとしていた。日本軍は旧式の武器でたたかいてはつづけねばならなかった。航空機の増産が最大の課題であり、学生・生徒らは徴用で各種工場に送りこまれた。あいつぐ応召により、農業人口が不足し、その結果食糧難になった。食糧は配給ではたりなく、

ひとびとはそれをヤミで買うようになった。昭和十九年（一九四四）になると、戦況がいちだんと悪化した。

決戦非常措置要綱につづいて、一億総武装が決定し、十七歳以上は兵役に編入されることになった。サイパン、グアムの島々の日本軍は全滅し、そこからB 29の日本本土空襲がはじまり、学童は国内各地に疎開した。六月、御前会議は、本土決戦を決定した。――全軍特攻、一億玉砕で戦うことを人民の眼のとどかぬところできめられた。七月、東条内閣が総辞職し、かわって小磯内閣が成立した。レイテ沖での海戦で、日本海軍の神風特別攻撃隊がはじめて出撃した。国内では敵前上陸にそなえて、竹槍訓練がおこなわれた。

昭和二十年（一九四五）、米軍がルソン島、硫黄島、沖縄に上陸し、はげしい戦いがくりひろげられたが、いずれも失陥（うしなう）した。やがて原子爆弾の投下とソ連の参戦により、八月十五日わが国はポツダム宣言を受諾し降伏した。無条件降伏をめぐっては、政府と軍部が対立し、陸軍の参謀本部、海軍の軍令部も戦争の継続を強硬に主張したが、天皇は外相の意見をいれて、降伏することにした。<sup>(14)</sup>

#### 一 戦時下の公認・標語と政府の告諭（いいきかせること）

太平洋戦争ちゅう報道管制がしかけていたため、一般国民はラジオや新聞がつたえるニュースから世のうごきを知るしかなかった。それがすべてまよかしの情報だとは思わなかった。が、一部の国民はその信ぴょう性をうたがった。戦後になって、ほとんどがための報道だったことを知るのである。軍靴の音がかまびすしくなり、軍部独裁体制へとつき進むなかで、政府は宣伝活動を開始し、国民に日本精神を発揮させ、国家への滅私奉公を奨励し、聖戦完遂のための「標語」を発表し、戦時の心がまえとさせた。

その代表的なものをつぎにかかげる（昭和十一年Ⅱ一九三六―昭和十四年Ⅱ一九三九までのもの）。

国民精神総動員

日本精神を

実践の上に

尽忠報国を

日常生活に

協定一致

国民精神総動員

貯へよ！

強力日本の建設へ

守れ大空

我等の責務

国策と共に

拓<sup>ひら</sup>け行くラジオ

一月十日 聴取者四百万突破

日本精神発揚

進め！

新東亜の建設へ

聖戦へ

民<sup>たみ</sup>一億の体当り

注・昭和十四年（一九三九）ラジオをもつ家は四〇〇万世帯をこえた。

敗戦色が濃厚になる昭和十九年（一九四四）から終戦の二十年（一九四五）にかけて、一般大衆は戦局悪化にともなう本土決戦への不安や生活苦（食糧難）から、えん戦的になっていた。かれらは生活への失望から、その不平不満のはこ先を政府の施策にむけるようになり、やがては反戦、反軍への不穏な言動へと走った。戦時下の日本は、不安とのろいと絶望の重苦しい世界であったと思われる。

官憲側の内務省警保局は、つねに民心の動向にするといい目をむけていた。

きんねん戦時ちゅうに特高警察が収集し、戦後占領軍によって押収された極秘資料が逐次刊行され、われわれはそれに目を通すことによって、当局のスパイ活動のじつたいや当時の世相をうかがうことができるようになった。

昭和十九年——戦局が終末にちかずき、物質に不足をきたし、空襲がはげしくなるにつれて、首都（東京）では荷物の疎開<sup>そかい</sup>や家屋のとりこわしなどが盛んにおこなわれた。荷物を地方へ移送するとき、優先的便宜をあたえられたのは省庁の高官であった。かれらはその地位や顔がものをいった。このころになると、不正乗車はあたりまえ、国民の道義（人のふみ行なうべき正しいみち）はすでに地におち、社会悪がびこっていた。

同年夏——すでに日本軍は、西太平洋の制海権をうしない、ようやく政府内部において終戦を画策する者があらわれるようになった。長距離爆撃機B 29が日本本土の空襲で使われたのは、北九州爆撃においてであった（昭和19・6・15）。十月、兵役年限が満十八歳に引き上げられた。

十一月からマリアナ群島のサイパン——テナン——グアムを発進基地とする日本本土空襲が定期的におこなわれるようになり、本格的な空襲は翌二十年（一九四五）三月九日（東京空襲）であった。

戦局の激化にともない、ますます物質が不足をきたし、配給とヤミ取引がはじまったが、世の中で幅がきいたのは、顔とコネであった。なんといっても多くの人口をかかえる東京の食糧難は深刻であった。主食である米のほか、肉—魚—野菜（サツマイモ、ネギ、大根など）——衣類<sup>しこう</sup>嗜好品（酒、タバコ）——衣類（くつ下、タビ、タオル）など、すべてが配給<sup>15</sup>になり、国民は長時間ならんでその恩沢をうけねばならなかった。闇ル<sup>やみ</sup>—トをもつ一部の特権階級（官僚、軍の高官、富裕層）らは、配給の行列にならぶことはなかった。

#### 一 通信検閲からみえてくる国民生活

ここでいう“通信”とは、東京から中国や満州などに宛てた郵便物のことであるが、当局がその通信文を検閲してわかったことは、不平不満の



大半は食物がじゅうぶんないこと、国民は戦争がはやく終わることを切望していることだった。また戦争の惨禍をうけた結果、えん戦感をのべる者もすくなくなかった。国民の“生の声”<sup>(16)</sup>をかいつまんで記すと、つぎのようになる。

配給制度になっても、食糧はじゅうぶんに渡らない。すこしでも余計たべたければ、闇で買ってたべるしかない。いまいちばん困るのは米である。二食分しかない。代用食といっても何もない。食いの屋も休みばかり。腹にこたえるものは何も売っていない。じつに人間がガツガツしている。

この分であと一年も（戦争が）つづいたら、しぜん栄養不良になり、また病気になるって死ぬ率が多く、餓死同様になるでしょう（東京 女）。

毎日腹がへって、腹の虫がグウグウいって、気持がわるく眠れません。早く戦争がおわってくれなくては、国民は飢餓のため、みな病気になるって、精神的にもだめになってしまいます（東京 男）。

東京の物質不足は、一日／＼と目立ってまいりました。米の足りないことは先ず話になりません。たいていは一日二食になりましたが、代用食もめいめい配給してもらえず、まだまだもっともっと時局は窮屈になるばかりでしょうけど、これでは健康者も栄養不良で、どんどん病気で死ぬことでしょう。戦争はどこまでも崇<sup>た</sup>りますね（東京 女）。

東京はまったくみじめなもので、配給ばかりで子供や病人はかわいそうです。お米が不足なため買いだしに行きますが、こんどはそれもできません（東京 女）。

一般庶民が食糧難とたたかっている最中、軍官や富裕層が統制をくぐって、何ら不自由なくくらしていることを指摘している。

東京の生活は、まことになさけない状態です。米の代りに干しうどんの配給。朝から晩までうどんです。砂糖もカツオぶしもない、うすいしょう油をかけて露命をつないでいるしだいです。

イタリアが停戦を発表したら、群衆がただもう訳もなく喚声をあげたといえます（きつと牛肉とパンが食べられると思って、おもわず叫んだことと思

います)

日本でもいわゆる時局便乗者や特権階級が飽食<sup>ほうしょく</sup>して、中産階級が滅亡するときに目にかびます。げんざいの中産階級の生活では、いかなる家庭においても、配給食品でさいてい限度に足りるものは一軒ありません。日曜日には、一家総動員して、近県の百姓家へ買いだしに出かける。こんな調子で三、四年もつづけば、もうおしまいです(東京 男)。

物質がすくなくれば、すくなくように、全都民に公平に配給せられるのであれば、すこしも不平や不満は申しません。しかるに大官の物置小屋には砂糖袋が何俵も積みあげてあったり、ある高官の台所の床下には、水菓子<sup>みずがし</sup>(くだもの)や野菜物がいっぱいつめてあったり、上層の人の多くは、闇や顔で、何の不足もなく日を送っており……

このように上層階級の一部には、他人の食糧難を意に介することなく暮らしている者もいたようだ。では一般大衆は、戦時ちゅうどのようなものを食べていたのか。都会といなかでは事情が異なるし、食糧があるところと無いところの差はあるが、東京を中心にとみると、そこは生地獄にちかかった。

代用食(主食の代わりに食べる食品)として配給されるものは——さつまいも——うどん——乾パンなどであった。

魚や野菜の配給はあってもごく少量。四人家族の家庭が、野菜の配給をうけたら、五日間にネギ一本だけだったという話もある。ひとは夜おかゆをすり、朝もすでにひからびてしまった空腹をかかえて、一杯のぞうすいにありつくために食堂のまえにならぶ。当時、都内には外食券をもたない者のための食堂——ぞうすい食堂が三三五軒あり、どこも行列せねばありつけなかった。値段は三〇銭<sup>(17)</sup>。

内務大臣が銀座のぞうすい食堂で試食した記事が写真といっしょに新聞に出たというが、このお大臣さまは、

——これはうまい。

とひじょうに感心し、店のものを激励したという。ろくに米の入っていない、水っぱいおかゆが、それほどうまいとは思えないが、これは口先だけの実意のないことばであろう。

ぞうすい食堂の利用者は、もっぱら下級階層の者であった。店によっては一人に二杯でも三杯でも売ってくれるところがあつたが、それにありつくには毎日ならばねばならなかった。しかし、上流階級は物資を入手するルートがあつたから、その必要はまったくなかった。

東条首相は、中学生の閲兵をしたとき、例によって一生徒の肩をたたき、

――何がいちばん欲しいか。

と聞いた。するとその生徒は、

――洋かんを一本たべたい。

と答えたところ、首相は、

――これで買って食べろ。

といって、五〇銭札を一枚あたえたという。

統制下、ヤミ買いは禁止されており、商品は没収された。そのため悲劇も生まれた。

荒川で子づれの女性が、ようやく手に入れたさつまいもを警官によって取りあげられてしまった。その女性はお巡りに抗議したところ、その者は――そんなにグズグズいうなら、死んでしまえ。

といった。するとその女性はいきりたち、子どもといっしょに川へ飛び込んで死んでしまった（東京 女）。

人になさけをかけず、心ない一言がその親子を死に迫りやったのである。

国民にとっての大問題は、食物があるかどうかということであった。食えることが先決問題であったから、戦争の話をしなくなり、二人よればいつも食物のことが話題になった。ひとは餓鬼道（がきどう 飢えとかわきにくるしむ）におちたのである。電柱には「戦争にまけてもよい、くわしてくれ」といったビラが貼ってあった。

戦局が悪化すると、ひとは他人のことをかまっている余裕などなく、じぶんのつごう、じぶんの利益だけを考えて行動するようになった。

食糧の確保は、死活もんだいであった。東京から汽車にのり地方に、あるいは電車にのり郊外に買出しに出かける光景がいつもみられた。大人にまじって少年少女がおもい荷物を背おい、汽車をまつあいだ、駅の待合室で居ねむりをしている姿をみることも珍しくはなかった。郊外にむかう電車の一五％～二〇％は、こうした買出し部隊で占められていた（昭和19・4ごろ）。

戦時下、ものがない、食物がない、といっても、あるところにはあった。人を使って国内をさがさせると、魚や肉、野菜やくだもの、酒まで手に入った。が、それらをヤミで手に入れるには、それなりに金がかかった。

警視庁経済警察部は、都下の高級料理店が、ヤミで仕入れた食材を使ってつくった料理を会員のみに提供し、暴利をむさぼっている、といったうわさを聞き、内偵をすすめていたが、ついにその料理屋をつきとめた。司法当局の観るところ、ヤミ行為は、経済秩序の反逆であった。摘発されたのは、ほんの一部であり、都下にはまだまだたくさんあるものと想像された。

目黒……「雅叙園」  
がじゅうらん

赤坂……「鶴の江」  
つるのえ

日本橋……西洋料理店「旧スコット」

これらの料理店は、価格統制令および奢侈品等製造制限販売規則、価格違反のけん疑で書類送検された。

「雅叙園」と「鶴の江」のばあい、手もとにヤミ買い専門の者を二、三十人おき、おもに神奈川県下で高級魚、野菜、くだものを買いもとめさせ、会員のみに一人前五十円から百円といった値段で料理を提供していた。これはいまの値段にして、五〇万円から百万円である。両者が一ヵ月にかせいだ金額は数千円という（『朝日新聞』昭和18・9・10付）。

西洋料理店「旧スコット」のばあい、夕食は一人前三〇円であった。このレストランは、（昭和十八年）一月ごろから浅草区千石町にある家庭用品配給店から、牛肉三五〇貫を九二〇〇円余払って、不当価格で購入したのをはじめとし、その後はブローカその他を利用して、近県からタイ・アワビ・車エビなど高級鮮魚を三八〇貫——九六〇〇円あまりで購入すると、ことしの五月ごろから延人員二二〇〇余人に、四万七千数百円ほどで売り、不当利益三八七〇〇円ほどえた。

これらの料理店の客すじだが、政界・財界・文壇の名士であった（『朝日新聞』昭和18・11・7付）。

ヤミ取引の価格表

種別	数量	昭和18・4ごろ	昭和18・12ごろ
米	一斗	一五円～二〇円	二〇円～五〇円
しょう油	一升	四円～一五円	五円～一〇円
砂とう	一貫	二〇円～三五円	五〇円～一〇〇円
油	一升	一〇円～一五円	九円～一二円
さつまいも	一貫	一円五〇銭～二円	二円五〇銭～五円
卵	一コ	二〇銭～三五銭	二五銭～五〇銭
牛肉	百匁	五円	一五円
小豆	一升	五円～一〇円	三円～一〇円
ノリ	一帖	九五銭～一円五〇銭	一円
かつおぶし	一貫	四〇円～五〇円	六〇円
煮干し	百匁	一円五〇銭	一円八〇銭
酒	一升	一五円～二〇円	二〇円～五〇円
りんご	一コ	二五銭～五〇銭	三〇銭
木炭	四貫俵	一〇円～二五円	
石けん	一コ	一円～二円	三円～六円
洋服	一着	三〇〇円～四〇〇円	三〇〇円
くつ	一足	七〇円～八〇円	八〇円～一二〇円
ソーセージ	一本	八〇銭	
ピーナッツ	一升	四円～五円	
とり肉	一羽分		一五円～三〇円
バター	一ポンド		一二円～一六円
コンビーフ	一かん		二五円

注・巡査の初任給が四十五円ぐらいのときの値段。

民衆はだんだん所かまわず、——電車のなか、食堂、フロ屋において、露骨に食糧不足をうったえた。かれらの不平不満の声は、ますます反政府的な色彩をおび、えん戦的な言動すらちらほらみられた。その憤まん、しっと、反感、怨嗟<sup>えんさ</sup>の声（うらみ節）は、特権階級や富裕だけでなく、天皇にまでむけられた。

皇室にたいする不敬な言動は、不敬罪にあたった。つかまれば当然、二ヶ月以上、四年以下の懲役である（第76条）。

戦争は陛下が勝手にやっているのである。やるなら市民大会でもやってから始まるべきである（栃木 職工 逮捕）。

こんなに骨をおって子供を育てても、大きくなると天皇陛下の子だといって持って行かれてしまふのだから、いやになってしまう（栃木 無職 女 逮捕）。

勅語は大臣がつくって、天皇陛下は目をおすだけだ。天皇陛下はかぎりもので、こんなものはごくつぶしだ（神奈川 農業 逮捕）。

百姓の保有米まで取りあげられて、百姓がやれるか。こんなことで戦争に勝てるか。兵隊は戦場で天皇陛下万歳といって死んで行きよるというがそうじゃない。必ずうらんで死による（高知 農業 逮捕）。

緒戦に成果をえたのは空巢狙ひをしたからだ。

（……）日本がこの戦争に敗けても、アメリカ人はその国民性として、日本人を奴隷いにはしない。憎むべきは戦争で、戦争は罪悪だ（千葉 鉄工 逮捕）。

新聞には勝った勝ったということを書いているが、事実はどうかわからん。アメリカの生産力は、日本の一に対し十五というおどろくべき割合で……（兵庫 高女教諭 授業ちゅうの発言 逮捕）。

英米よ長期戦にいでよ、日本政府の倒る、間近かし（静岡 街頭落書）。



日の丸の思想と赤の思想とは決戦段階にあり、勝利は共産主義者の胸の中にあり、奮起せよ赤旗の下に立て 共産主義者（兵庫 工場内落書）。

日本帝国にもいよいよ来るべきものが来た。何であるか、マルクス主義（岩手 便所内落書）。

天皇および皇族を葬り<sup>はらむ</sup> 日本共和国にせよ（岡山 警察留置場のトビラの落書）。

昭和二十年（一九四五）一月、米軍はルソン島に上陸した。三月には硫黄島、四月には沖縄にそれぞれ上陸を敢行すると、はげしい戦いがおこなわれた。が、日本軍は戦果をあげることができず、ひたすら守りの戦いを余儀なくされた。敗退につぐ敗退、やがて迫る本土での戦いの行くえが案じられた。政府は口をひらいては、“必勝の信念”とか、“必勝の態勢”というが、だれの目にも精神論で近代戦を闘いぬくことができないことは、火をみるよりも明らかだった。国民感情の底流には、えん戦的気運（傾向）があり、敗色がこくまるにつれて、戦局にたいする不安やいらだちから、しだいに反戦的、敗戦的傾向をしめすようになった。

それは落書き——投書——流言ひご——その他の言動として表面化した。こうした現象は、敵機が投下してゆく“伝単”（宣伝ビラ）から影響をうけ、反戦・反軍的思想に共鳴した結果とも考えられた。

伝単は、敵国の将兵や国民の戦意を低下させたり、恫かつや説得をしたり、投降をうながしたりするための“ちらし”である。日本軍も満州事変（昭和6Ⅱ一九三二）以降、アジアや太平洋地域でたくさんばらまいた。が、太平洋戦争末期、アメリカやオーストラリア軍は、日本の各都市に何百万枚も投下した。たとえば、つぎのような標語がある。<sup>18)</sup>

ドイツ崩壊 住民に告ぐ（対沖縄） 兵隊に告ぐ（対沖縄）

日本国民諸氏（対日本人——トルーマン大統領の警告）

日本国民に告ぐ!! 日本の皆様

戦終ル  
たたかいおわ

## 日本降伏

平和来ル  
へいわきた

注・オーストラリア軍のもの（対日本軍）

### 一 戦時下のレジスタンス

昭和期に入ると、社会主義者・自由主義者・キリスト教系非戦主義者らによる、戦争への抵抗運動が、さまざまの形でおこなわれたが、そのうごきは官憲の取締まりの強化により、しだいに姿を消していった。けれど抵抗の炎は、終戦まで地下でくすぶっていた。

昭和四年（一九二九）は、共産党の大檢舉（四〇一六事件）、東京市電のストライキ、世界恐慌がおこった年でもあるが、年のくれの十二月四日——法律と政治、自由と進歩の老舗大学——法政大学の学生が、軍事教練、反動政治、帝国主義戦争などに反対するピラをまき物議をかました。それは、近衛歩兵第一旅団の営庭（兵営内の広場）において、軍事教練の査閲がおこなわれる直前のことで、田安門のまえに不穏なピラが数枚まかれた事件であった。

軍教其の他一切の反動政<sup>（ついで）</sup>反対！

帝国主義戦争反対！

査閲をボイコットしろ！

日支・日鮮・日台の学生団結万歳

反帝同盟万歳

反帝同盟法政班

不穏文書をみつけた、配属将校はおどろき、学校当局と協議したうえ、麹町署に依頼して、学生がのりおりする主要駅および道路を警戒させた。

学校当局は、教練の主旨をよく理解しており、不穏分子の発見につとめ、ただちに放校処分<sup>とくはん</sup>に附する方針だとのべた。

昭和六年（一九三一）は、満州事変がおこった年である。が、この年の秋九月——品川の大崎工場一帯で“反戦ビラ”をまき散らす事件がおこった。同年九月二十三日の夜八時から九時ごろ、大崎町居木橋ふきんの工場一帯から上大崎方面にかけて、「帝国主義戦争絶対反対」のビラを数十枚ばらまいた者がいた。大崎署で犯人を捜査中という（『読売新聞』昭和6・9・24付）。

日中戦争がはじまった昭和十二年（一九三七）当時、戦争反対のうごきは、労働組合や農村運動のなかにあるといどあらわれていたという。共産党の思想的影響がまだ残っていて、いろいろな反戦ビラをばらまいたり、慰問品のなかに反戦的なビラや手紙を入れたりするうごきが相当あったらしい。

京浜・大阪方面において、昭和十二年から同十五年にかけて、人民戦線的なグループをつくるうごきが胎動しつつあったとき、活動家は当局に逮捕された。

太平洋戦争がはじまる一年前——昭和十五年（一九四〇）九月上旬——キリスト教社会運動家の賀川豊彦<sup>とよひこ</sup>（一八八八—一九六〇）は、陸軍刑法違反の嫌疑で東京憲兵隊に逮捕され、数日前から渋谷憲兵分隊に留置され、取調べをうけた。アメリカの雑誌に日本に不利な記事をのせたほか、内地の各所で、反戦趣旨の講演をおこなったことが、当局の忌にふれたものである（『読売新聞』昭和15・9・5付）。

太平洋戦争がはじまったとき、革命的な労働者グループの組織的なものはほとんどなかった。が、開戦翌日の昭和十六年（一九四一）十二月九日——全国で約三千名の進歩的な“危険人物”が予防拘策された。とくに東京よりも大阪がひどく、すっかり根こそぎもっていかれた（守屋典郎談「8・15記念座談会——敗戦前後」『日本評論』八月号所収、昭和24・8）。

昭和十八年（一九四三）から二〇年（一九四五）にかけて、一般大衆のなかに反戦ムードがわいてきたのは事実だとしても、組織的なものでなく、不満分子の微少的なうごきにすぎなかったようだ。太平洋戦争がはじまると、反戦運動はびびたる勢力にすぎなかったが、関西地方——大阪や香川に小さな抵抗グループがあったらしい。太平洋戦争末期の板橋志村の軍需工場では、ひそかに反戦ビラをつくっていたという。

当局が共産主義運動によって検挙した事例は、——

昭和十九年（七、八件）……………二二〇名

昭和二十年（二十八件）……………五七名

であり、その数はきわめて少数であり、運動も組織的なものでなかった。

しかし、コミニズム運動は、社会ぜんぱんにわたっており、合法場面を利用して巧妙におこなわれているので、一般大衆にあたえる影響力を無視できないという。個別的、分散的に、運動が展開されていた分野は――

工場（労働者を対象とする）      学界      教育界      出版界      技術、文学界

などであった。

昭和十九年当時、警視庁によって検挙され、取りしらべを受けた学界関係者に、法政大学関係者では――

留岡清男（一八九八―一九七七、昭和期の教育家。同僚の城戸幡太郎と教育科学研究会を結成、雑誌『教育』を創刊。治安維持法違反容疑で拘禁。戦後、北大教育学部教授）

城戸幡太郎（一八九三―一九八五、昭和期の教育研究者。戦時下、科学性と合理性にもとづく教育研究の道をもとめたが、治安維持法違反容疑で拘禁。戦後、北海道学芸大学長）

などがいた。この二人は、教育界における指導的人物と目されていた。

当局が観るところ、教育科学研究会なるものは、「プロレタリア教育ノ 人民前線の形態ニシテ 雑誌『教育』ノ編集部ヲ拠点トシテ活動シ来レルモノ」であった。

法政のマルクス主義哲学者でかつ花形教授でもあった三木 清（一八九七―一九四五）が、昭和十九年初頭に治安維持法違反で検挙される直接

原因となった高倉テル（一八九一～一九八六、大正・昭和期の社会運動家。戦後、参院議員となるが、マッカーサーによって追放された）は、農業コルホーズ化運動の件で検束された。

高倉は農業問題の研究家としても知られていた。そのころ各地の工場において、“工場農園”を対象とした農業コルホーズ化運動があらわれるようになった。高倉は工場や農園がもつ左翼的な意義を重視し、それらの指導者として活躍した。

当局が危ぐしたのは労働者が、工場農園の作業にしたがうことによって、日本の農村問題の現状にふかい関心をもったり、半封建的な日本農業と工場農園をくらべることによって、農民が階級闘争をはじめ、そのしっくから解放されることを望むことであった。

#### 一 罹災者と壕舎生活者

本格的な本土空襲がはじまったのは、マリアナ群島の米軍基地が整備されてからである。

昭和二十年（一九四五）三月九日——いわゆる“東京大空襲”において、米軍はB 29三〇〇機によって、一七〇〇トンの爆弾と焼夷弾を人口稠密な下町を中心におとし、十五万平方マイルを焼き、九七〇〇〇名の焼死者をだした。B 29による空襲は、東京・名古屋・大阪・神戸などの大都市以外に、国内のめばしい都市にもおこなわれ、落した爆弾・焼夷弾は九三三七三トンにものぼった。

首都の東京だけでも一連の空襲によって、五十一％が焼け野原となった。

全焼家屋……………	二百三十三万戸
半焼、半壊家屋……………	十一万戸
空襲による死者……………	二十四万人
負傷者……………	三十一万人

注・長尾和郎著『戦争屋——あこのころの知識人の映像』妙義出版株式会社、昭和30・12。

泥にまみれ、火に焼かれ塗炭のくるしみを味わったのは何の罪もない一般市民であった。家や家財、家族すらなくした被災者が、つぎに考えね

ばならぬのは、くらしのことであった。

まず雨つゆをしのごための住居、食べものをどうするかということであった。

罹災者の移動先は、都内および他府県の縁故者の家——公共の収容所（学校）——空襲にそなえてつくった壕または壕舎と呼ばれる地下の穴ぐら——バラック（そまつな仮小屋）などであった。壕舎はまともなものではなく、衛生上問題があった。便所、排水、水道、灯火の設備など、改善の余地をのこしていた。雑居生活であるから退廃的な気風がみなぎっていた。

たとえば四ッ谷区内——西町、愛住町、左門町、大原町、須賀町における風紀びらん、窃盗、と博、売いん、不正配給申告など、放逸なる事例が報告されている。

左門町のばあい、さいきん夜鷹（売春婦）が姿をみせるようになり、暗い防空壕のなかで淫わいな行為におよんでいるという。また調査地域の壕には、ひとり者の女工、女事務員がいるが、彼女らは少なからず単身の男と同せいしていた。壕舎では娯楽というものがなかったため、手すさびにばくちを打つ者もいた。当局がとくに監視しているのは、“ゆうれい人口”を申告して、食糧の不正配給をうけようとする壕生活者がふえてきたことであった。

四ッ谷区内にあった壕舎は、バラックをふくめて一、二七七戸であった。壕舎の住民は、ラジオとか新聞などにめぐまれていなかったから、各種の流言飛語にまどわされやすかった。

あとがき

昭和二十年（一九四五）八月十五日……正午のことである。

——これより畏くも天皇陛下のご放送であります。謹んで拝しますよう。

——起立っ！

この号令が放送されると、国民はラジオのまえで直立不動となった。ついで国歌「君が代」の曲がながれ、それがおわると、玉音がきこえはじめた。



一般国民には、天皇の声が、よくきこえなかったし、むずかしい漢語が多いため、その意味がよくわからなかったようだが、なんとなく戦争がおわったことを知った。

戦争の終結を知ってよろこんだ者、ほっとした者、落胆した者、虚脱感におそわれた者、その思いはさまざまであったであろう。

敗戦は厳しゅうな事実であった。昭和十二年（一九三七）七月の日中戦争から、じつに八年一ヵ月。昭和十六年（一九四一）十二月八日に太平洋戦争が勃発して、三年八ヵ月。日本史上、わが国はこんなにながい間戦争をやったことはなかった。太平洋戦争で陸海軍の戦死傷病者は、

四百九十二万人

アツ島、サイパン島などの島で玉碎した兵の数は、

二十万人

という。それに罹災者、広島・長崎の原爆の被害者（約三十万人）をふくめると、おどろくべき数字である。

日本民族は、へたをすると原爆によって絶滅するところ、<sup>てんしん</sup>天神の<sup>こゑ</sup>声によって、間一髪のところ救われたともいえる。

日本を亡国の一步てまえまで追い込んだ元凶はだれであったのか。かれらを訴追するには、はるか明治までさかのぼって考えねばならない。それは明治維新の推進者であり、まずあたらしい国家機構をつくるときかかわった公卿（三条太政大臣、岩倉右大臣、有栖川左大臣）や倒幕派の草もうの臣のほか——神話教育——「大日本帝国憲法」——「教育勅語」——「軍人勅諭」——「戦陣訓」などの立案と起草に関係した人びとである。

国家経世の学をといいた吉田松陰（一八三〇～五九）、洋学による殖産興業をとなえた開国論者・佐久間象山（一八一～六四）、新しい政治を構想した志士・坂本龍馬（一八三五～六七）、藩論を統一し討幕運動に結集させた志士・高杉晋作（一八三九～六七）——これらの人びとは、維新の起爆剤であり、かれらは高い志をもって国家や民族のために尽力したが、新しい時代の夜あけをみることなく逝った者である。

その遺志をついだのは、廃藩置県を断行した西郷隆盛（一八二七～七七、幕末・維新期の政治家）、資本主義育成政策を推進した大久保利通

(一八三〇～七八)、国憲制定の急務を論じた木戸孝允(一八三三～七七)らであり、かれらは維新の三功臣として参議になり、政事の中枢にあった。これら的大物も明治十年前後までに亡くなり、ついで政界の主役として登場したのは自由民権運動の一翼をにない、大正四年(一九一五)中華民国に二十一か条要求をつきつけ、内外の批判を受けた大隈重信(一八三八～一九二二)と、天皇制確立の功労者、伊藤博文(一八四一～一九〇九)である。

天皇制国家をささえる藩閥政府の要人らは、じぶんたちの政治権力を維持強化するために、天皇崇拜の観念<sup>ニ</sup>神格化をもちだし、それを天皇を中心とする国体(専制的政治形態)とした。

憲法は、国家統治の基礎をさだめた法である。憲法素案の起草の勅命が、明治帝より元老院に出されたのは、明治九年(一八七六)のことである。元老院(左院の後身、明治八年に設立)は、その意を体して、憲法制定の準備に入った。が、国のおきてがないまゝ、国内では士族の乱、西南戦争(明治10)などがおこり、それが平定されると、こんどは自由民権運動が高揚し、国会開設要求の声も大きくなっていった。

明治十四年(一八八一)三月——大隈重信は、二年後の明治十六年をもって「国議院」(国会)の開設を上奏した。大隈が考えていたのは、イギリス風の議院内閣制であった。いわゆる「君民共治」(君主と人民の代表から成る議会が、いっしょにその国の政務にあたる)がそれであった。しかし、この考えは、伊藤博文や三条、岩倉らからすれば急進説であり、受け入れがたいものであった。

当時、政党すらないときに、そんな国会をひらいたら小党が不裂し、はげしい権力闘争がおこり、政治が混乱する懸念があった。また大隈を代表とする自由民権派が力もち、国家運営の主導権をにぎることを恐れた伊藤一派は、策謀をめぐらし、参議の大隈を免官にした(明治14年の政変)。

伊藤らからすれば、国の基礎がまだ固まっていないのに、国家の運営を民権派に牛じられることは何んとしても避けねばならなかった。

伊藤は憲法起草の命をうけるや私擬憲法のように民権を偏重し、一君万民の国であることを忘れる弊風をさけるための根本方針をさだめた。日本の国体の特殊性をかんがえ、天皇の大権(統治権)を確乎不拔(しっかりとし、ゆるぎのない)の基礎のうえに置き、皇室の尊厳が永遠につづく規範をつくりたいとおもった。(『伊藤博文伝 中巻』)。

伊藤は明治十五年(一八八二)五月から翌年の二月までドイツ、オーストリアに滞在してモッセ、グナイスト、シュタインらから憲法の講義をうけ、一年半後に帰国すると、井上 毅(一八四四～九五、明治期の官僚)をして憲法の起草にあたらせた。井上は外務省の法律顧問カル・フ

リードリヒ・ヘルマン・ロessler（一八三四～九四、ドイツの法学者・経済学者）に、私的な憲法草案をつくってもらったが、それは「日本帝国憲法草案」（エントウルフ・アイナー・フェルファスング・フュア・ダス・カイザートゥーム・ヤパン）と題するもので、これが「大日本帝国憲法」（明治22・2・11発布）の基礎となった。

ロesslerは「大日本帝国憲法」の第一条原文にある「大日本帝国ハ 万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」とあるような、誇張表現を憲法に盛り込むことに反対したらしい。<sup>(20)</sup> なぜなら天皇の血統が、こんご何百年何千年つづくのか、だれにも予知できないからである。<sup>(21)</sup> かれの案文の第一条は、日本帝国は永久に分割されることなく代々うけついでゆく君主国とする、というもので、帝位は世襲とするとあった。第二条は「天皇ハ神聖ニシテ 侵スヘカサル、帝国ノ主権者（国家統治の権力者の意——引用者）ナリ」という。そして天皇は、いっさいの国権を総攬し（国家権力を一手にぎり）、この憲法において欽定したる（定めた）規定にしたがい、これをおこなうとあった。

かくしてわが国の民衆は、「大日本帝国憲法」発布後、絶対主義的天皇制のもとに、天皇統治という政治形態（国体）にそった歴史・思想によってさらにしめつけられ、人民の権利を主張する民権主義は封殺された。

戦前の日本を毒した最大のものは何んであったのか。それは天皇を君主とおおぐ、封建時代とすこしもわからない統治体制であり、神話教育と徴兵制（法にもとずいて一定期間、いやおうなしに兵役につかせた）であった。日本国民はこの二つのしこくから脱することができぬ奴隷であった。わが国を厄難にあわせ、国をほろぼす寸前まで追いやった元悪は、すめらぎとその側近であったといわれ、なかでも輔ひつ（天皇の行為についての進言者）——御用学者——官僚——軍閥（軍の力を背景とする軍人の政治的勢力）——財閥らであり、かれらの果たした役割はじつに大きかったといえる。

そもそもろくに資源や経済力をもたぬ弱小国家の日本が、明治維新後、藩閥官僚政府をつくり、資本主義膨張主義路線をひたはしり、富国強兵（国をゆたかに、兵力を大きくし、国威をつよめる）をスローガンに、欧米列強にならって帝国主義の仲間入りをしようとしたことに日本崩壊の主因があったようだ。

戦いにやぶれた日本は、連合軍の進駐をうけ入れた。やがてGHQより、つぎつぎと指令がだされ、日本の解体がはじまった。……

注

- (1) 『歴史教育の確立と前進』 同学社、昭和28・3、八三頁。
- (2) 伊豆公夫「天皇支配の成立過程」『新日本史講座「古代前期」』所収、中央公論社、昭和26・12、四頁。
- (3) 『日本の国ができるまで——目で見える日本史』 日本評論社、昭和25・4、三二頁。
- (4) 訳注『宋史』 日本伝、四六頁。原文は二三四頁。『旧唐書後国日本伝』 宋史日本伝・元史日本伝』 所収、岩波書店、昭和31・9。
- (5) 『日本大百科全書』 16 小学館、昭和62・7、四一五頁。
- (6) 『日本教科書大系 近代編 第18巻 歴史 (一)』 講談社、昭和38・8、七二八頁。
- (7) 山県悌三郎(二八五八〜一九四〇) は、近江のひと。教職をへて文部省御用掛。
- (8) 三島 一「わが国における歴史教育史」 佐藤弘一編『日本歴史講座 第八巻 歴史教育篇』 所収、河出書房、昭和29・10。
- (9) 土屋喬雄「日本再建の史的考察」『国史』の科学的研究『潮流』第一巻二月号所収、吉田書房、昭和21・2。
- (10) 注(8) におなじ。
- (11) 『昭和二万日の全記録 第4巻 日中戦争への道 昭和10年〜12年』 講談社、平成元・10、五三頁。
- (12) 同右の二五八頁。
- (13) 『昭和二万日の全記録 第6巻 太平洋戦争 昭和16年〜19年』 講談社、平3・1、二七〇頁。
- (14) 『写真週報』に見る戦時下の日本』 世界文化社、平成23・11、一八九頁。
- (15) 『東京大空襲秘録写真真集』 雄鶏社、昭和28・8、五〇頁。
- (16) 以下「生の声」の引用文は、内務省警保局文書——『敗戦前後の社会情勢 第一巻 戦争末期の民心動向』 所収、現代史料出版、平成10・12——からぬいた。
- (17) 『二億人の昭和史 ③ 太平洋戦争 昭和16〜20年』 毎日新聞社、昭和51・1。
- (18) 一ノ瀬俊也著『宣伝謀略 ビラで読む 日中・太平洋戦争』 柏書房、平成20・8。
- (19) 堅田 剛著『明治憲法の起草過程 グナリストからロエスラーへ』 お茶の水書房、平成26・12、一五頁。
- (20) 梅 溪昇著『お雇い外国人 11 政治・法制』 鹿島研究所出版、昭和46・12、一六八頁。
- (21) 藤田嗣雄<sup>つぐお</sup>「井上 毅の憲法立法への寄与」『日本学士院紀要』第12巻第2号所収、昭和29・6。

主なる参考文献

明治期に高等小学校、高女、中学校用に刊行された「修身」「国史」などの原本——本稿において引用したものは、書名を省略する。

- 平田敬先生遺本 門人渡辺重石丸訓点 『新刻 古語拾遺 全』 気吹舎塾蔵版、明治3・3。
- 青山延于著 『正統 皇朝史略』 製本所、文淵堂 文敬堂、明治14・4。
- 法政大学講師 皇明会長 四宮憲章謹修 『皇民 平解古語拾遺』 皇明会出版、昭和6・9。
- 『国体の本義』 文部省、昭和12・5。
- 土屋喬雄 「日本再建の史的考察 『国史』の科学的研究」 『潮流』第1巻第2号所収、吉田書房、昭和21・2。
- 伊豆公夫著 『日本古代史』 光文社、昭和21・12。
- 松村武雄著 『日本神話の実相』 培風館、昭和22・6。
- 社会科 第三学年用 『大むかしの人々』 文部省、昭和23・10。
- 文部省 『くにのあゆみ 上』 東京書籍／大阪書籍、昭和21・9。
- 『日本評論』 日本評論社、昭和24・8／昭和24・12。
- 伊豆公夫編 『全訂 日本史入門』 正旗社、昭和25・3。
- たかはし しんいち まつしま えいいち みやもり しげる 共著 『日本の国ができるまで——目で見える日本史』 日本評論社、昭和25・4。
- 瀧川政次郎著 『日本歴史解禁』 創元社、昭和25・12。
- 伊豆公夫著 「天皇支配の成立過程」 『新日本史講座「古代前期」』 所収、中央公論社、昭和26・12。
- 三島 一 「我国における歴史教育史」 佐藤弘一編 『日本歴史講座 第八巻 歴史教育篇』 所収、河出書房、昭和29・10。
- 長尾和郎著 『戦争屋 あのころの知識人の映像』 妙義出版株式会社、昭和30・12。
- 矢内原忠雄編 『戦後日本小史 上巻』 東京大学出版会、昭和33・9。
- 石原道博編訳 『旧唐書倭国日本伝 宋史日本伝・元史日本伝』 岩波書店、昭和31・9。
- 『日本終戦史 八月十五日のクーデターほか 上巻』 読売新聞社、昭和37・7。
- さくらだ・クラブ編 『天皇むかしむかし』 角川書店、昭和30・9。
- 『日本教科書大系 近代編 第一八巻 歴史(一)』 講談社、昭和38・8。

- 梅 溪昇「憲法制定とロエスレル」『お雇い外国人 11 政治・法制』所収、鹿島研究所出版、昭和46・12。
- 『二億人の昭和史 ③ 太平洋戦争 昭和16年～20年』毎日新聞社、昭和51・1。
- 藤原 彰編『資料 日本現代史 1 軍隊内の反戦運動』大月書店、昭和55・7。
- 宇治谷 孟『日本書記 上』（全現代語訳、講談社、昭和63・6）。
- 原田勝正編著『昭和世相史』小学館、平成元・4。
- 所 功「発掘 昭和天皇が学んだ特製『国史』教科書」『文藝春秋』二月号所収、平成2・2。
- 『昭和二万日の全記録 第1巻 昭和への期待 昭和元年～3年』講談社、平成元・6。
- 白鳥庫吉著『国史』勉誠社、平成9・4。
- 『昭和二万日の全記録 第7巻 廃墟からの出発 昭和20年～21年』講談社、平成元・10。
- 粟谷憲太郎  
中園 裕 編集・解説『敗戦前後の社会情勢 第一巻 戦争末期の民心動向』現代史料出版、平成10・12。
- 『戦時下標語集』大空社、平成12・5。
- 角川書店編『ビギナーズ・クラシックス 古事記』角川学芸出版、平成14・8。
- 一ノ瀬俊也著『宣伝謀略ピラで読む、日中・太平洋戦争』柏書房、平成20・8。
- 堅田 剛著『明治憲法の起草過程——グナリストからロエスラーへ』御茶の水書房、平成26・12。
- 藤岡信勝著『日本人が目覚めた 国難の日本史』ビジネス社、平成27・5。